

ケージ

塚田源秀

ケージに入って二週間になる。入っているというのは、まるっきりその中に住んではないからであって、その日の気分にもよるのだけど、最近では寝る時間も含めて九時間くらいにはなるだろう。睡眠時間がだいたい五時間として、起きている時間が四時間ぐらいか。うたた寝とかあるからその辺りはいい加減なもので、入っているのと住んでいるのちやうどその間ぐらいなのだろうか。

プラスチックの床の沈み具合や、柵にあたる背中もさほど痛くもなく違和感すらなくなってきた。タオルケットを折りたたんで、二重、三重にして背中に当てればなお結構である。床は割れるといけないので、すのこを敷いている。ケージは縦にも横にも増やすことができた。ネット通販で買ったのだが、猫や犬の大きさや数によって増設することができるようになっていて本当に使い勝手がいい。ケージを延ばそうと思えば、どれだけでも延ばすことができるようになってる。組立て自体も今では半時間もかからない。もともとは猫を飼うというより捕獲するために最初の一個を買ったのだが、通販で買ったのがこれで二度目、今では高さが一八〇センチ、縦横

はそれぞれ二〇〇センチぐらいか。上には天井があるので、横へ延ばしていくしかない。最初のうちは猫の臭いに閉口した。猫が嫌いな人だとわかってもらえるのだが、猫のオシッコは相当なもので、とにかく鼻につくしつこいような臭いで犬とは全然ちがう。それもようやく慣れてくうちに臭いもなくなってきた。

でもこの居心地の良さはいったい何だろう。いろいろ考えてみるのだが、トイレなどもそうだが、四方を囲まれて外的から身を守りやすいということなのか、それともずっと遡って母の胎内にいたころの感覚で、本能的なものなのか。ケージから家の中を見渡すと、本当に広いという実感しかなかった。いずれにせよ、これから少しずつこの中にいる時間が長くなりそうな予感がある。

それでもケージの出入りの際は、さすがに彼らのための出入り口を利用することもできず、片方の柵をヨイショと持ち上げるのだが、もう一方を紐でゆるやかに固定しているものなかなか間口を開けることができず、腰を鋭角に曲げてやつとのことである。

私は、もちろん仕事は持っている。近くで小さなカフェをやっているが、最近ほとんどマユミさんに任せている。四十半ばだ。一人でできますから、オーナーは好きなことやっていてくださいという力強い言葉に甘えてしまっている。お菓子作りと接客が好きで、昔から自分の店を持ちたいという夢があったらしい。冷凍やレトルト食は嫌い、作る物すべては一から作りたいという主義で、ファ

ンも少なからずいる。私の家にも時間があれば寄ってきてくれる。仕事のこともあるが、私の母に会って話をしたいと言う。耳も遠いし、独り善がり何で何を言っているかわからないのに、どうしてと聞くと、マユミさんもよくわからないと言う。

ケージに入って間もない頃、飛び込みの営業マンが家にやって来たことがあった。玄關先でやけに右に左にまた後ろに足を動かし、顔も上から下へ家の中も覗きこもうとしていた。

「立派なお家ですね。これだけのお家、そうそうありません」

「もう、ぼろぼろです」

「ちらっと見えたんですが、すごい大きな柱で。もちろん樫ですよ」

若い男は、私が不審そうな顔をしていることをさとってか、すみません、すみませんと言つてスーツの胸ポケットから名刺をだして、けつして怪しいものではございませんと続けました。どんなお家でも修繕します！と名刺におおきく派手に書かれていた。スーツやネクタイも鮮やかな青と赤の薄っぺらな生地でお世辞にも仕立てのいいものとはいえず、その男の資質を表しているようでもまるつきり信用できないように思えた。でも時間もあつたので、ちようど気分転換にもなると思つて家の中に入れた。

「この樫の太さ、建具も明治のいいものでしつらえて」

土間に足を入れるなり、ささら戸や柱などありとあらゆる物をさわつていく。

「でも、もうぼろぼろです。百年ぐらい経っていますから」

「百年！」

「でも、もうぼろぼろです」

私は繰り返した。

奥の居間の方からテレビの大きな音量が土間まで響いていた。

「和也か？ 誰かお客さんか」

テレビの音量に乗って母の声がした。

「お母さまですか？」

「ええ」

「ご主人さん、今日は仕事はお休みで？」

「近くで、お店をやつていて。今日もそんなに忙しくはなさそうだし、スタッフにまかせています」

あつ、そうだと思い、男を床の間へ案内した。男は靴を脱いで、その靴の向きを直した。こういう営業をやっているせいか、最低限の作法は知っているようだ。

座敷に上がり、目についた梁や建具、屏風、壺といったものに触つていって、仏壇に入ると手を合わせた。仏壇は開けたままである。香炉の周りには焼香があちらこちらに飛び散っている。黒くなったマッチが香炉からはみだしている。仏飯器には、ご飯ではなく、小ぶりの餡パンが載っている。花は半分枯れていて、赤くなつた花びらや葉が落ちていく。

「いやあ、立派な仏壇です。金箔もそうです。彫りなどの仕事が見事です。釘一本も使つてないでしょ」

男はまるで骨董屋みたいに仏壇の中を覗き込んでいた。

「汚いでしょ。掃除が行き届かないで」

「そんなことないですよ」

男はいろいろ話をしていたが、私はほとんど耳を傾けずに襖を開けた。

「見てもらいたいものがあって」

床の間の真ん中にはケージがあり、その向こうには縁側と裏庭が見える。男はその対比に戸惑った様子で、こちらに顔を向けた。

「実はこれなんです」

「猫か犬を、ここで……」

「いいえ、まさか」

私です、と自分を指さした。

彼はきよんとした顔をして、ケージに視線を移した。中には、シーツにクッション、見開いた本などが入っている。私はケージの一方を持ち上げてその中に入ろうという姿勢をつくって、なかなか入ることができなくてね、と男に笑みをつくった。

「私の住処なんですけど、この出入りが大変だね。何とかならないかと思って」

男はうつむいて何も喋らなくなってしまうた。

しーんと静まった空気のなかで、居間から続く縁側のほうから長くて重たいスカートをはいた母が、よたよたとこちらにやって来た。

男はこの場の異様さを感じてか、このあともう一軒お邪魔するところがあるので、と後ずさりしながら帰っていった。

ケージに入るきっかけは裏庭に棲む猫がはじまりだった。裏庭にはずっと昔から猫とキツネが交互に棲むようになった。いずれも出

産と子育てにやってきた。ちょうど庭の周りの垣根がぐるっと扇形状になっていてすき間もなく家の裏側に引っ付いていたので、きつと天敵から身を守るにはうってつけの場所だったのだろう。私らが縁側にいて彼らと目を合わせると母猫や母キツネが短い甲高い鳴き声を発し子供に知らせ、一斉に縁の下にさつと入っていく。キツネは巢立ちまで半年ぐらいまで棲みついていたが、猫は人間社会に溶け込んでいるせいか、何か大きなことがない限り、なかなかその場を離れようとはしない。猫の習性で一、二週間いなくなることはあるが、大抵は戻ってきた。

この二、三年に限っては猫が棲み続けていた。家の周りに新興住宅地ができ、林、田畑も少なくなりキツネにとっては棲みづらくなってきたにちがいない。それに比べれば猫の適応力はたいしたものだ。キツネはもうこないのだろうか。

そんなことの繰り返しは毎年あって、その様子をずっと見てきた私の母も年老いて八十を越えてしまった。母はこの家で生まれ今まで長女であったため一度も外にでることもなく家にいた。婿入りの父はとうの昔に亡くなり、今では母と私の二人暮らし。母は近くの病院と介護施設で二十年近くボランティアとして働いていて、半年まえに施設へ行かなくなった。ずっと、利用者のお話し相手をしてきたそうだ。行かなくなった理由はわからない。二、三度聞いたことがあるが、うつむいて何も言わなかった。ワタシはあそこで一番ながく働いてるんや、みんなにかわいがられ

て、所長さんも優しくしてくれて、ボランテ
イアだから定年もないし、二言目には、いつ
もそう言っていたのに。たしかに、母の生き
がいの場所だったにちがひなかった。

母はその後、ずっと家にいた。朝夕の仏壇
のお勤めや墓参り以外のほとんどは居間にあ
る炬燵の中に寝転んでテレビを覗いて、食
事も寝起きもそこで済ませていた。唯一の楽
しみは猫の餌付けだった。施設へ行かなくな
ったちようどその頃、雌猫が縁の下で四匹子
どもを産んでいた。何日後かには母猫と四匹
の子猫が縁側のガラス戸に顔を出して居間に
いる私たちの姿を見てニャオニャオと鳴く。
キジトラと黒が二匹ずつ見えた。

「餌付けするから、こうなるんじゃないか。
どうするんだよ、母さん」

毎年のこと、言っても無駄であるが、でも
言いたくなる。

「何。ワタシは耳が聞こえんで、もっと大き
な声で言うてえな」

「餌付けしたから、こんなことに。どうする
んだよ」

「ほら、見てみ。かわいいやろ」

私にもっと見ろという仕草であごをつきだ
してニコニコしている。

「いい加減にしろよ！」

炬燵の台を叩いた。

「大きな声で、親に向かって何やその態度は、
バチがあたるぞ。放つといってくれ、ここはワ
タシの家や。いややったら、出てってくれ」

そのまましばらく放っておいたら、母猫の
姿が見当たらない。三、四日したらまた戻っ

てくるだろうと思っていたが、そのままどこ
かへ行ってしまった。もうすぐ雪が降る季節
になろうとしている。私としても保健所に持
っていくことや山に捨てていくことだけは出
来なかった。厄介だと思いつつ、りんごの入
っていた発泡スチロール箱に使わなくなった
毛布の切れ端を敷きつめて、縁の下に置いた。
縁側の板張りが傷んでいて、そのすき間から
覗くことができた。まるで里芋のようなころ
ころした格好で身体を寄せ合い、温めあつて
いた。

子猫たちはガラス戸に顔をひつつけてニャ
ンニャン鳴いている。母は炬燵から出てよぼ
よぼとしたさまで居間と縁側の引戸を開けっ
ぱなしにし、縁側に出た。ガラス戸を開ける
と、またたく間に縁側に入ってくる一匹のキ
ジトラにもう一匹のキジトラもつられて入っ
てきた。あとの黒二匹はこちらの様子をうか
がいつつ縁の下に出たり入ったりとウロウロ
している。そのうち四匹の猫が母の足元に身
体を擦りつける仕草をした。私は居間からそ
の様子をずっと見ていた。母は傍にある戸棚
を開けて大きなえさ袋を取り出し、手を突っ
込んで、わしづかみした餌を縁側にばら撒い
た。そうか、わかった、わかった、お腹が空
いてたんやな。お前たちのお母さん、どこへ
行ってしまったんやろな、とさらに餌袋に手
を突っ込んで居間にばら撒いた。その餌の
いくつかが居間にも飛び散ってキジトラの一
匹が入ってきた。私の目と合いシャーと威嚇
するも行動は大胆であった。そんなことがし
ばらくの間つづき、キジトラ一匹、黒一匹が

姿を消した。恐らくいずれも雄ではないかと勝手に推測した。きつとどこかにいる雌を求めて一人前のノラとして旅立っていったのだろう。となると残る二匹は雌、これも推測だった。二匹は母に大いに懐き、私が夜、仕事から家へ帰ると二匹は炬燵布団を顔までがばつとかけている母の傍に体を丸くしていた。目を細めて、炬燵布団の暖かさを実感している姿であった。縁の下に比べれば、天と地の差である。

その頃の夕食といえば、私がスーパーで買ってきたお惣菜だった。割引シールが貼った品が三品ほど並ぶ。ご飯は炊くときもあるが、レトルトご飯で済ませることも多い。母は片方の手が常時しびれていたが、それでも作りたいという気持ちがあつて、サツマイモの蒸したものとや大根の煮たものを作っていた。ほとんどの食材が鍋の底で真っ黒こげになっていて、コンロの周りには噴きこぼれたあとがそのまま放置してある。

「おかしいな、いつもどうり作ってるんやけどな。でも美味しいで食べてみ」

「いらん。真っ黒こげじゃないか。もう何回言わせるんや、火事になったらどうすんの。もう、まともなモノはつくれんようになったのを自覚して」

「おかしいな、おかしいな、こんなのはじめてや」

母は鍋の中を覗き、首を何度も傾げた。そして箸を使わず、手で鍋の中のおかずをつかみ、自分の口の中に入れるなり、猫の辺りにポイッと投げた。猫はすかさず、ムシヤムシ

ヤと食べた。

その頃からか猫がネズミを捕ってくるようになった。口にしたネズミを見せびらかしたのか、私の前に置いて、行儀よく座った。食べるという仕草はどういうわけかしなかった。それからエスカレーターして、私が仕事から帰ってくると、居間や仏間、座敷にネズミや鳥の死骸が放置されていた。母の万年床の炬燵に敷いたカーペットをめくると、一瞬、埃とゴミの塊かなと思ったら黒い尻尾のようなものがあつた。ネズミ！ 押し花ならぬペラの押しネズミが出てきた。かろうじて内臓はでていなくて、原型をそのままにべたんこのさまだった。塵取りと箒をもって、さらには消毒液を噴霧すると、汚い家やし掃除せんでもええ、猫も喜んで持ってきてるんやで放っておいたらええ、と母は言う。

手に負えないと思った。このままだと家が汚くなるどころか、猫屋敷になってしまう。猫の捕獲と母をどうにかしなければならぬ。もしかしたら母の一連の行動は認知症からくるものではないかと疑った。私は行動にでた。まず市役所の老人福祉課へ行って相談すると、介護認定を受けるまでの流れを教えてください。そしていくつかの手続きをふんで、ある日家の座敷で包括支援センターのスタッフ二人、ケアマネジャーと寄り合っているいろと相談した。三人とも私ぐらいの五十ぐらいの女性たちであった。介護認定を受けるまで少し時間がかかるので、まず、週二日のデイサービスの利用を勧められた。

「今まではボランティアとして行っていたの

に、これからは利用者として行くわけですか。プライドだけは高い母ですから、素直に納得するかどうか……」

「そうですね」

ケアマネージャーがうつむくと、他の二人も黙り込んでしまった。

私ははっと思いつき身を乗り出した。

「だったら、こういうのは協力してもらえますか？」

私は、ひとつ提案をした。「母をだますことになるのですが……。施設の方から母にボランティアに復帰して欲しいということをお願いしていたことはできますか。人手が足りないのでは是非とも母に週二回でいいから来て欲しいと」

三人とも顔が緩み、目を見合わせた。

「きつかけとしては、いいかもしれません。」

お母さんはずっとお話し相手をされていたわけですから

スタッフのひとりが答えた。そして私に調べておいてくれた事を付け加えた。

「お母さんが辞められた理由はわかりませんが、施設側からやめて欲しいとかトラブルがあったということはありません。どうして、信子さんが突然辞められたのかわからないんです。信子さんの上靴もまだありますし」

隣の居間には炬燵に寝ている母と猫がいる。障子を開けて、母のもとに皆が寄った。二匹の猫は座敷の方へすつと逃げていった。ケアマネージャーが掛け布団ごしに母の肩をトンと叩いた。

「信子さん、信子さん」

母はむくつと起き上がり、どなたさんやろ、和也のお友達ですか、と目をまるくした。

「福祉の人たちが来られたで」

母の耳元で大きく口にした。そして、三人を紹介した。

「信子さん、以前ボランティアされていますね。施設の方から、週二回でいいので、来てもらえないかなと思って、お願いに来さしてもらったんです」

ケアマネージャーが母の手にそつと手を重ねた。

母はその状況をつかめない様子ではあったが、そのうち何度もうなずき「この歳までやらせてもらうのは、どうやろと思って。近所でも、ボランティアしたい人たくさんやあって、その人たちから妬まれたりしてな」

「それは、お母さんの被害妄想やで。誰もそんなこと気にしてないって」

「そんなことない。自転車で行き来してるとな、畑している人とか、じつと睨まれたりしてな、羨ましがられてるの、このワタシ」

「そんなことない。周りの人が、お母さんが自転車に乗ることを心配していたの」

それは母の誤解だった。いつもフラフラして自転車を漕いでいる母の姿を見て、いつか大きな事故につながることを心配して近所の何人もの人が私にも言ってくれたのであった。つい先日にも赤信号で渡った自転車の母と車の接触があったばかりだった。

「施設のスタッフや利用者の皆さんが信子さんの戻ってくるのを待っていますよ」

ケアマネージャーが母の耳元でゆつくりと

口にした。

「寂しかったんや。ワタシ、ほんま行かせてもらってええやろか」

母は顔を上げ、皆に笑顔を見せた。

一方で猫の捕獲がすすまなかった。インターネットで「猫の捕獲」と検索すると、効果があるものとして、害獣捕獲器があった。餌に釣られた動物がプレートを踏めばバチンと内部に閉じ込められるものだ。早速買って試してみた。猫の好きな魚の干物を仕掛けて、二匹のよく行き来するところに置いた。じつと観察していたがまったくかすりもしない。餌を変え、場所も変えた。それでもだめだった。動物病院に聞くと、ノラ猫は警戒心が強く捕獲は難しいという。その中でもすすめられたのが、餌で釣って大きめの洗濯アミを被せるということだった。手足で外そうとすると、アミの中に爪が絡んでしまうということであった。一人では対応できないので、二人でやってください、ということだった。マユミさんに一〇〇円ショップで洗濯アミ二つ買ってきてもらった。

「買ってきたわよ。ね、捕まえたはいいけど、その猫どうするの?」

マユミさんは、手提げの白い袋を掲げた。

「えっ?」

そうだった。捕まえることだけに頭がいっぱいで、その先を考えていなかった。

「だったら、少しお金がかかるけど、ケージを買ったらどうかしら。ケージに入れて、その後、ゆっくり考えればいいから」

ケージを買うにしてもどれを買っていいの

かわからず、けっきょくネット通販の評価の高いものを買った。猫が上下運動できる二段式の大型ペットケージで、猫の飼育には充分適した余裕のあるケージと書かれていた。一段目と二段目の境には柵板スペースがあり、寛げるようになっていく。さっそく説明書とおりに組立てていくと、これくらいの大きさだと猫もストレスを感じないかもしれないと思った。

私とマユミさんとで、片方が餌で釣って呼び寄せ、もう一方が洗濯ネットを上から被せるといふ作戦にでた。縁側のガラス戸を少し開け、餌で寄って来てはするが、片方が洗濯アミで被せる準備をしたところで、猫は警戒して逃げる体勢をつくっていた。逃げられないよう三方を板で囲いをし、ガラス戸もすぐ閉められるようにしたが、それ以上にすばしっこくすつと戸から逃げていった。何回か繰り返したが、猫も自分が捕らえられることを認識しているらしく、餌をやっても近づいて来なくなった。

母は居間から私たちのことをじっと見ていて、何か言いたそうだった。私は視線をはずし、今日はあきらめよとマユミさんに言って、縁側にばら撒いた餌を片付けようとした。

居間の戸がガツと音がして、「何してんのや、大の大人が二人もそろって」とあざ笑った。マユミさんが「お母さん」と口にして、こちらに来ようとしてもたまたしている母を支えた。貸してみと言って、縁側の餌を集めて、傍にあったケージの猫の出入り口を開けた。

「クロちゃんにトラ子、おまんまやで」

縁の下に入った二匹の猫がまたびよんと縁側が上がって、母の方へ歩き、二度三度母の足元に身体をこすりつけた。餌をケージの中に放り込んだ。猫達は何のためらいも警戒心もなくすつとケージの中に入っていった。

週二日、デイサービスに行くことが決まった。母は素直に喜んでとまではいかず、うれしさ半分と戸惑い半分といったところだろうか。施設からボランティアに来て欲しいという話にまだ疑いをもっているようだ。ひとつに、利用者でもないのに施設の車が母を送り迎えしてくれるということであった。それは容易に言い訳が立った。ふらふらしてもう自転車に乗れない事情があり、且つ家の近くにも何人かの利用者もいるため、送迎の車が不便なく来ていただけるということで母は納得した。引っかかったのは施設からの書面だった。持参するものがいくつか書かれており、その中にお風呂にはいるための下着類も入っていた。

「なんで下着なんや。利用者でもないのに、どうして風呂に入らなあかんのや」

母はキッと私とマユミさんを睨んだ。

「お母さんは足腰も悪くて、なかなかお風呂に入りたがらないでしょ。それにこの家のお風呂昔のタイル貼りで滑るし、そして寒いから。施設だったら暖かいし。ねっ、利用しましよ。実はこちらからもお願いしたの」

マユミさんは母の肩を叩いて笑った。

「それに母さん、ほとんど風呂に入らないし猫臭いし」

私は母に寄って鼻をつまんだ。

「わかった。なら行かしてもらおうわ。嘘ついたら大バチがあたるでな」

そうして、はじめのころはすったもんだがいくつかあったが、そのうち行くことが自然のように、母は迎えるの時間より十五分前に玄関先で座って待っていた。唯一母のいいところは、順応性が高いところである。

二匹の猫はゲージの中で、日中騒ぐことなく前脚をたたんでじっとおとなしくしていた。野良として生まれてきたので、閉じ込められたところでは暴れるかと思いきや、そうではなかった。たちまち猫屋敷にならないことにはっとした。猫のことは私のほうで世話するからと母に念を押ししたものの、私らがない間に母は何をしでかすかが気がかりであったが。朝夕の餌やりと便の始末。餌はお専用の安いフードでも美味しく食べてくれた。ウンチはいつも軟らかくとかく臭かった。それにしても、二匹は朝夕の餌の時間にニャオと鳴くぐらいで、ずっと目を細めて何を考えているやら、まるで哲学者のような孤高の存在のように思えた。

仕事から帰ってから、糞の始末と餌をやり終えて、この何日間は胡坐をかいてケージ越しの二匹の猫をずっと見ていた。二匹の猫は中二階の棚板スペースにいて互いに干渉することもなく座っていた。ケージの中に閉じこめられて自由さを奪われたという感もなく、むしろ日に二度の餌がもらえて、寒風にもさらされることもなく与えられた場所での寝起きしたほうが幸せということなのだろうか。

私の勝手な思い込みであるが、きっと子猫なりの短い人生ならぬ猫生の今までにない幸福感に浸っているようにしか思えなかったのである。

私は二匹の猫を見ながら、これからのことを考えていた。母のことはあれこれ考えてもしようがない、一ヶ月後の介護認定を待つてからである。

そんな折、ある日仕事から帰ってくるとケージに二匹の猫がいない。空の餌入れと、トイレがあるだけだ。炬燵に仰向けに寝ている母に聞くと、知らんなと視線を合わせようとしない。嘘や、何か隠してるやろと問い詰めると、ワタシがいない時、誰か家が上がって猫を逃がしたんに違いないわ。猫を飼ってることに妬んで誰かがそうしたんやと天井を向いて一気呵成にしゃべりまくった。やはり母の作業だと確信した。冗舌にしゃべる癖は母が嘘をついている証拠なのだ。掌の鮎パンのかすを見せて、その炬燵の上にあるパンやつたやろ、ケージの床に落ちてたでと言うと、ああ少しやったとちらっと私を見て言った。

母を問い詰めても仕方がなかった。どうせ、扉をあけて猫を逃がしてしまったのだ。どうしたわけか、それ以上責める気持ちはなかった。どんな猫だって好きなケージであってもずっと狭いところにいれば、体もなまってもよつと外の空気を吸いたくなるに違いない。そのうち、扉を開けておけば、戻ってくるかもしれない。

そしてしばらくの間、家の周りを捜したりもしたが、一向に戻ってくる気配もない。や

はり、ケージが嫌でもう戻ってこないのだから。本来であれば、いなくなつて喜ぶべきであったが、この空しさはどこからくるのだろうか。主を失ったケージはただの放っておかれた冷たい檻にすぎなかった。

天気の良い日、ケージを庭で洗って消毒した。洗車した後のように、ぴかぴかと光っていく。風も少しあつて、ケージはすぐに乾いた。上の柵を持ち上げ、ふと何げなくケージに入つてみたいと思ひ、靴を脱いで、プラスチック製の床に足をそろつと下ろす。とうぜん人が入る前提で作られてはおらず、ミシッという音とともに床が下がる。割れるといけないので、縁の方に足を下ろし体重も一点にかからず分散させるようにした。柵を下ろして、体育すわりに近い姿勢で少しの時間を過ごした。悪くない。床の補強とケージがもう少し広ければ、いつときであっても過ごせるではないか。まだツンとする猫のしつこい臭いはそのうち無くなっていくはずだ。

ケージを床の間に戻して再び入ってみる。うん、このケージの中、結構いけるかもしれない。柵越しには庭と床の間があり、四方に目をやってみる。風が出てきたらしく、木の葉がゆれ、小鳥もせわしく木から木へ飛び回っている。完全に閉ざされた空間も悪くはないのだが、長く過ごすのであれば、柵ぐらいいいのかもしれない。でも、この落ち着きは何だろう。もう三十年まえにもなるだろうか、当時フランスの新人作家で、主人公が自宅の浴室に居を構えて生活する作品があつて、

ちよつとしたブームになったことを思い出した。たしか映画化もされていて、いちばん知りたところであった、どうして家の中の浴室に入ったかという大きな理由は提示されていなかったように記憶している。仮に、私がケージで居を構えるような作品を書いたならば、どうしてケージに入ったかと理由を書かなければならないだろう。浴室を書いた作者にしろ、はたして明確な理由など持っていたのだろうか。そんなことを考えながらうつらうつらとしてしまった。

居を据えて二週間が経った頃、マユミさんが家にやってきた。どう、住み心地はと聞いた。

「悪くないよ。二匹の猫の気持ちができるような感じかな」

文庫本を閉じた。

「何、読んでいたの？」

「プルーストの『失われた時を求めて』という本。今までもなかなか読みとおせない本だったんだけど、ここだと読みとおせるかなって思ってた」

「長い物語なの？」

「すごいよ、全部で十三巻かな。原稿用紙で一万枚、まだ一卷も読み終わっていないんだけど」

「どんな話？ 面白いの？」

「うーん。なんて言うか……フランス文学なんだけどね、紅茶に浸したマドレーヌを口にしたとたん、幼時のころの記憶がよみがえって徒然なるままに描かれていくんだ」

「マドレーヌだったら、私も作っているわ。そのレシピあるの？」

「レシピまでは載ってないと思うよ」

「マドレーヌで、遠い記憶が呼び起こせるのね」

ほぼ毎日会っているのに、ケージ越しで話していると、ずいぶん会っていないような錯覚をおこす。

居心地をよくするために、更にもうひとつケージを買い足し、床にすのこを置き、切り貼りのカーペットを敷いていた。座る際には、どうしても側面の柵に背中が当たるのでタオルケットを当てた。

「でも、出入りが大変だね。柵を持ち上げないと、入れないんだ」

「布団も入っているけど、ここで寝ているの？」

「クッション代わりにするし。さっそく昨日、

一晩寝てみたんだ。寝心地も悪くないよ」

「トイレは？」

「ああ、トイレか……さすがにオマルを置くわけにはいかないからな」

「なんだか、柵越しで話していると、刑務所で面会している感じね」

マユミさんの顔がぐっと近づいて、柵に片方の掌を当てた。

「すこし犯罪者か動物になった気分かな。でも不思議といい気持ちなんだ」

「ね、ね、私も入っていいかしら」

彼女は顔を輝かせた。

「えっ」私は首を横に振った。少しいたずら好きで旦那彼女だけに、何をしかすかわか

らない。首を縦に振ろうものなら、彼女はまたたく間に服を脱いで入ってくるかもしれない。でも私は今そんな気分にもなれないし、そろそろ母がデイサービスから帰ってくる頃だからだ。

マユミさんが帰った後に、母が戻ってきた。「まだ入ってるんか。入って何か仕事でもしてるんか？」

母はヤマザキの五個入りの餡パンを手にして、その一個を柵の間から入れようとした。

「いらぬ。修行の身だから」

横にあった正信偈しょうしんげのお経を見せた。

「お前、檻の中でお経を唱えてるんか？」

「そう。正信偈の意味を勉強しているところ。親鸞さんも流罪にあっているから」

手を合わせて南無阿弥陀仏と三回唱えた。母にはこう言っておけば事が済む。弘法大師の真言宗などの現世利益に熱心だった母もいまでは、地獄に落ちたくないのか、悪人でも助けてくださる浄土真宗に熱心である。何事にも南無阿弥陀仏に結び付けておけば、ひとまず安心なのである。

ここに正信偈の解説本がある。仏壇の前で小さな頃からただ何の意味もわからず、経文はただ唱えるだけのものではあったが、この歳になってあらためて一文一文の意味を見ると、親鸞は人が生きてく上でいろいろな教えをお経として記していたのかと思う。その教えをただ何の意味もわからず、小さい頃から何千回いや何万回と唱えてきたのだ。親も寺の僧侶も、きつとこう言うだろう、意味がわからなくても、口にはしていることは意味が

あって、それが大事であると。そうだろうか、しようじき、私のこの体に精神に血肉となっているとは思えないのである。まだまだ煩惱のかたまりであるからだ。ケージに入っている今だからこそ、こういった機会に恵まれたのかもしれない。読みかけの文庫と教本で充実したケージ生活が楽しめそうだ。

今日はよく働いた。平日にもかかわらず、お客がよく来た。ドリンクはあまり出さず、ランチばかりでバタバタとした。ランチは手間がかかって利幅はとれず、ドリンク一杯の利幅とほとんど変わらない。充実感があるかと言えば、ない。いくらかの予想していた売り上げと、ただ疲労感が残るだけだ。ついついぼやき気味になると、マユミさんから「好きでやっているんでしょ」といさめられた。

不思議と飲食店にかかわらずこの店も、来るのを待ち構えていると、誰も来ず、ああ今日はダメだと気を緩めると来る。昼どき暇でカップ麺なんか食べようものなら必ずその時だけ客が来て麺が汁を全部吸ってしまつて食べられない始末に。風呂場の湯船に浸かって手で自分の方へお湯を来い来いとすると湯はするりと逃げていき、逆に行け行けとする湯はやってくる、そんなある種の空気というか目に見えない方程式が隠されているのかもしれない。

よくよく考えてみれば、普段の生活だってそうかもしれない。今日は休みだから出かけたと思うと外は雨、天気がいいかと思うと、一日中外にでられず暗いところで誰かに頼ま

れた用事をする。家でゆっくり本でも読んで
過ごしたいと思うと誰かがやって来る。すべ
てが断片化されてしまう。

夕方近くになってある程度の片付けと明日
の準備ができたから早くケージに戻ろうとす
ると、証券マンがやってきた。今忙しいから
と言うと、「ひとっだけ聞いていただきたいこ
とがあつて」と引き下がらず、私を家へ帰さ
ない。五分だけと私が言うと、やはり十分、
十五分と時間が過ぎていく。ケージの中でど
う過ごそうかと考えていて、彼の話を上の空
で聞いていた。今が買いのチャンスです。下
がったら買い時だ。上がっていたらまだまだ
買ってもらつても大丈夫、耳にたこができる
くらい同じことを喋っている。聞いている私
も、私だ。ほとんど損になる話を、どうして
聞いているのだろう。買ったら下がる、売っ
たら上がる。この前の薬品会社の銘柄もそう
だった。癌治療の新薬の開発で勧められて買
った株が、開発研究の発表直前、研究結果の
数値が期待しているより低く株価が大幅下げ
になってしまい、それが二、三日続いたので、
ついに売ってしまった。すると、しばらくし
てけっしてその数値は悪くなかったようで癌
だけではなくその他の病気にも大いに役に立
つということがその業界からでて、ストップ
高が二日続いた。これもある種の空気という
か目に見えない方程式が隠されているのかも
しれない。いずれにせよ、アメリカのヘッジ
ファンドの会社が全世界の株価を仕掛けて、
莫大の金を儲けているのは間違いないのだ。
末端の個人はそれに追隨していくのだが、も

うその時点では事は遅すぎるのだ。

私は勧められた株を買わなかった。証券マ
ンは肩を落として帰っていった。恐らく、そ
の株は数日後くらいに暴騰していくだろうと
思えた。

店が休みの日、朝からケージに入っていた。
マグカップにたっぷり入った深煎りのコーヒ
ーをすすり、パンはクロワッサンを一つだけ
にした。お腹がいっぱいだと脳が働かないか
らだ。朝の陽の光が縁側の一枚ガラスを通し
てケージの中に少し降り注いでいる。わずか
な風がリズム良くガラス戸にあたって耳に心
地よい。まだ足元が寒いので、上布団をかぶ
せた。これぐらいの暖かさがいい。ぼかぼか
だと気持ちよくなつてうとうととしてしまう。
読書も進むし、確定申告まえの事務的な作業
も進んだ。

母はお勤めの後、縁側の奥にある筆筒の中
をごそごそしていた。今日はデイサービスの
ない日なのだ。下の引き出しから着物を包む
ような茶色のたとう紙を取り出した。母は手
招きして私を呼んだ。上の柵をいちいち持ち
上げるのも大層であつたので、後にしてと言
つたが、母は捲くし立てるように私の名前を
呼んで言うことを聞かない。トイレにも行き
たかつたのでケージから出て母の方へ。油紙
のようなつつみをあけると、ナフタリン臭が
鼻につき、萌葱色もえぎの網目に紅布の縁取りされ
たものが見えた。

「あつ、蚊帳だ。家にまだあつたんだね」

「猫の檻の中のお前を見ていて、ふと思いだ

したんや。どうや、懐かしいやろ」

母はたたまれた蚊帳を手にして、開けようとした。

「それ、どうするの？」

「そんな檻やめて、せめて蚊帳にしたらどうや……他人が見たら、頭が変に思われるしな。もうすぐ、法事もあることやし」

「蚊帳か……」

せっかくだからケージの隣に蚊帳を拵げて四方の長押なげしにあつた鉤に引掛けて吊つてみた。もつと大きいものかと思つたが、意外にも小さかった。入った。畳に大の字に寝てみた。目を閉じると、子どもの頃が懐かしく思い出された。いつも母や祖母が川の字になつて横に寝ていてくれた。あれほど安心できる場所はなかつたように思う。あの頃、まだ網戸というものもなく、戸は開けっ放しで、夜、蛍光灯の灯りがうすぼんやりと蚊帳越しに見えて、庭や月が近くに見え、緑の中をすり抜けていく風の匂いもした。月明りで思い出したが、梅雨の前に蛍を十匹ほど蚊帳に放して遊んだこともあつた。たまにカブトムシも飛んできたことも。夜陰ではスズムシやマツムシが鳴いていた。まだ夢の続きにいる不思議な気持ちにしてくれた。

母はもうその場にはいなかった。ケージの代わりと言つたが、蚊帳は違ふように感じた。蚊帳に入っている間、私はずっと夢のつづきをみているに違ひない。そして、私は蚊帳を出た。

その日は終日ケージで過ごすことにした。

今では店の事務的な処理もケージ内でやるこ

とがほとんどで、店でやるよりも集中できた。狭いところは便利だ。ものぐさの自分にとつては、すぐ手に伸ばせるところに物があるのがいい。周囲を見渡した。この実家も百年経つてただむやみに大小の部屋があり、開かずの箆筥がいくつもある。そこがあらゆる物置場となつてしまつた。法事や葬儀以外、仏間や床の間などの広い部屋はまったく使い道がないのだ。家一軒ぶんぐらいの値段がした仏壇だつてこれからどうすればいいのか。そんな母は物を何ひとつ捨てられず、片付けたものが見当たらず探す行為をずっと繰り返している。しかしひよんなきっかけで、ケージの中にいる私を見てふいに蚊帳を思い出したりすることもあるのだ。

昼ごろになつて、マユミさんが手製のおにぎりを持ってきてくれた。私はケージの中でいただき、彼女は居間の炬燵で母と一緒に食べている。母は耳が遠くお互い大きな声で喋り、笑っている。二人はきつとこの前の老人会の旅行のことを話しているのだろう。母は足腰も悪く一度は不参加で申し込んだが、マユミさんが一緒に付いていつてあげるといふことで急ぎよ一緒に参加した。目的地が比叡山だつたので、坂道も多くマユミさんがずつと車椅子を押し、付き添つてくれた。みんながマユミさんのことをひそひそと噂したそうだが、そんなことも気にせず逆に楽しんでくれるのが彼女のいいところだ。また彼女には所帯じみたところがまったくなかつた。いつもどこかあつげらんとしたところがあつた、そこが不思議と心地よかつた。彼女と過ごす

時間も多くなった。周りでは私たち二人を夫婦と思っている人もいるようだ。法律上、彼女は独身であって、なにもやましいことはしていない。マユミさんとの関係がはじまったころ、彼女が私に、死水を取ってあげるからといったことがある。冗談半分と聞き流してはいたが、ケーキを作る彼女の真摯な姿勢を見てみるとまんざら偽りのない気持ちなのかもしれない。

ケージで過ごす時間も少しずつ増えてきた。仕事から帰って、軽い食事とシャワーを浴びてケージに入るように心掛けている。有意義な時間を過ごすためだ。とくにうとうとして朝まで寝過ごさないように気をつけている。テレビは観ない。アルコールも飲まないが、寝つきのわるいときは、ワインをたしなむ程度だ。さて、何かをはじめようかと思うと、不意にジープンの着信音が鳴った。着信音はスマートフォンに着信音が鳴った。着信音はバイブレーションにしているつもりなのに、本当にうとうとうしい。設定が間違っているのか。画面を見ると、フェイスブックのお友達が待っていますという文字と小さく顔写真がでてくる。併せて、どこかの広告も出てくる。それで放っておいたらいいものを、明日の天気は？あの選手勝ったかな？意識しているものの、知らず知らずのうちにクリックしている自分がいる。電車内で多くの乗客がスマートフォンをいじっている姿をみて異様な光景と感じたものだが、私だって同じ穴の貉である。役に立つことも多いにあるが、やるべ

きことがあるのに、知らず知らずのうちにどうでもいい波に流されていて、気づいた時には岸から大きく離れている自分がいることに気づく。

果たして自分はこのケージの中にいつまで居つづけるのだろうか、とふと思ったりもする。ただ興味本位に楽しんでいるのか、はたまた自分は昨今社会問題になっている引きこもりの一種なのだろうか。居心地がいいのは確かだが、ケージの中の自分を訝ったりもした。いつでも出入りできるケージで、トイレ、食事、お風呂だって好きなときにとれて、セックスだってやろうと思えばやれる。そんなぬるま湯の中で、そもそも自分は何に対峙しているのか。そんなことを考えていると、何かの罪で服役した知識人やタレントらの出所した姿を思い出した。それはテレビで観たのだが、一様に痩せてすっきりとした姿で、そのなかで誰だったか、いままで読み通せなかった本を読めて良かった、自分を見つめ直すいい機会になった、と語っていた人物がいた。ドストエフスキーの文学から哲学、宗教学まで読み通したと言う。やせ細った顔立ちであったがどこか一本芯の通った人相が印象的だった。しょうじき、うらやましかった。私も、自由の身を拘束されてもいいから、一度でいいからそんな状況をつくりたい。すすんで牢屋に入るといふのは非現実的ではあるが。

今日は、父の法事の日である。法事といえどもみんなが休みの日曜日と相場が決まっているので、商売をやっている身としてはつらい。

商売と亡くなった祖先の供養とどちらが大切かと天秤に量られると言葉がない。法事はたまにあるものだから、慣れなくて苦手である。床の間のケージは隅っこにおいてクロスをかけておくことにした。

朝十時 座敷のすみに正座し、客人を迎えた。扇子はあらかじめ、頭を下げる位置のところに置く。客人の一人ひとりに対して、「本日はお忙しいなか、父の二十七回忌にようこそお参りいただきまして——」と決まり文句の挨拶をして頭を下げたが、後ろに座っていた母は私の背中越しに朗々として心のこもった挨拶をした。まったく普段の母と違うのではないか。ちらつと後ろを向くと、「しっかりと挨拶をせなあかんがな」と言っ、母は苦笑いしている。「すみませんな。こんな年になってもまともな挨拶が出来ませんで。都会で暮らしていることが長かったもので」と相手に何回も頭を下げる。

僧侶が到着して、客人を奥の仏間に案内し、お勤めが始まった。客人の多くが年配者ということもあり、お経を熟知しているのだろう。一人ひとりに配った在家勤行本を手をせず、僧侶の調子に合わせてすらすと唱えていく。私は僧侶のすぐ後ろに座り、最初はお経が持つ独特のリズムに合わせることができず、勤行本を手にとって文字を追うのが精一杯だったが、それでも少し時間が経てば何とか合わせることができた。

最初のお経が終わり、僧侶が「少し、休憩をとります」と言われ、私は居間に下がってお茶の用意をする。

一人ひとりにお茶を配していると、前に座っている年配の男性から、昨夏の暑さや、稲の生育のことなどの世間一般の話を僧侶に向かって切り出す。僧侶は「そうですね」と周辺の村や家のエピソードを交えながら場の雰囲気をつくろうとする。僧侶の存在はいかなく発揮され、機知に富んだ話に、後ろに座るおばさん達も、前かがみになり小さく頷く。「和也君、仏壇のろうそくを取替えなあかんで」

前列に座る親戚筋のおじが顎を出して言う。私は何気なしに目の前にある白いうそくを立てようすると、「それは違う。赤いうそくを立てるんや」と。まるで私は、黒板の前で、算数の答えが解けない出来の悪い小学生のようだった。金色の鶴の形をしたろうそく立てがまだ二本空いている。後ろの多くの視線を感じながらもじもじしていると、横から僧侶が法衣の袖を上げて、それぞれのろうそく立てに合うろうそくを手で示してくれた。

次のお経が始まるものの、僧侶の後ろで経本の字面さえもなかなか目や頭に入らなかつた。たかがろうそくの立て方を知らないくらいと思うのだが、それなりの大きな仏壇を家に持つ五十をこした大人であれば、普通これくらいの事は知って当然のことであって、周りの目を気にしなくてはならない。仏壇の生産どころでもあり、浄土真宗の根付くこの地域は、一昔前までは家の格式を比較する上で、家そのものの大きさよりも仏壇の大きさと装飾に重きを置いたそう。今のろうそくのこ

その場でメモを取ることもできず、法事が終われば頭のどこから飛んでしまい、まあいかと思ってしまう。

膳の前のあいさつを終え、ひとり一人にお酌してまわる。おおかた差し障りのない挨拶でいどで終わるが、こういう場に限って一人二人は小言を並べる人がいる。親戚筋のおじもその一人である。

「和也君、商売はどうや？　ここの長男やろ。どんな女でもええ、はよう結婚して連れて来い」

少しの酒で顔が真っ赤になったおじは大声で、さっと私の目の前に杯を返してきた。

「はあ……そうですね」
何の返答もできない私は、返しの手で受け取り、酌まれる酒をゆっくりと飲み干すしかなかった。

法事を終え、やっと居間で寛ぐことができた。ネクタイをゆるめ、足をのばした。母は三つ下の叔母とお茶を飲みながら世間話に興じていた。それにしてもよぼよぼだった母がこういう場に限って、しゃきとした姿を見せたことには驚かされた。

ケージに入りたい半面、法事を終えた後のこの充実感なんだろう。苦手な事を終えたからであろうか。昨日の神社のお祭りもそうだった。お店があるということでの十年のあいだ参加できていなかったが、村内の氏子の人たちと久しぶりに交わることができ、清々しい気持ちで氏子としての役割をこなせたという実感であった。神社の社務所で氏子のみならずと向かい合うのは本当に久しぶ

りだった。

いろいろな話を聞いていると、この十年の間にも、神社の行事やお祭りのかたちも大きく変わってきたようだ。氏子のほとんどがサラリーマンということもあってか、行事は簡素にならざるを得なくなってきた。長老は、神社の行く末を心配する。しめ縄にしてもそうだ。もち米を作る農家がほとんどなく、しめ縄を買ったかどうかという若い声に長老は首を縦に振らない。

私は、同世代のみんなの顔を近くで見ると、一様に老けているように思えた。顔にしわをつくり、すでに頭の薄い人もいる。長く会っていないせいもあるだろう。昔の思い出しかないのだ。子供のころの面影を残しているものの、それよりも印象深かったのは、それだけの顔、姿が、彼らの父親にそっくりなのだ。私は子供のころの自分が迷い込んで、ここに座っているような気分を味わった。彼らの顔には、過去からのしきたりや行事というもの、を当然受け継がなければならないものとして、父親の顔、ひいては家の顔としてあったように思えた。それに比べ、私は今まで、神仏やそれらの伝統行事やしきたりに関してはいっも遠ざけていた自分がいた。それは神仏に限らず、「家」にしてもそうだったのかもしれない。それは拘束、束縛されることへの逃避で自由になりたかっただけではないか。では、はたして自由を味わえたのだろうか。

母に要介護3の認定の通知が届いた。医師の長谷川式スケールをもとに、前頭側頭型認

知症と診断された。頭部のMRIで前頭葉や側頭葉の萎縮が見られるということだった。

その日、母を診察した医師から詳しい話を聞いていた。

「お母さまは、こだわりが強いとか、毎日決まった時間に決まったことをするとか……それに甘い物をきよくたんに欲しがるとか……」

「ええ、すべてにおいてそうでした。お金や信心や墓参り、家、動物に対しても。こだわりという次元ではなくて執着です。甘いものはとくに餡パンをよく食べます」

「この前お聞きした、赤信号で横断歩道を渡って車に接触した事もそうですね」

「絶対に青で渡ったと言い張っています。警察が嘘言っているって」

「一連のこだわりは、いつ頃からですか？」

「——ずっと昔から。私が子どものころからです」

「そうですね」

医師は視線をカルテに移してうんと頷き「おそろくですが、お母さまは、最近でなく、もう少し前からこの前頭側頭型認知症だったと考えられますね。もちろんその時はまだ軽微だったと思われませんが」

「えっ、そうだったんですか」

「ええ、間違いないと思います。和也さんもよく頑張られましたね」

「それが母だと思っていましたから」

「そうだと思います。結果的にそう捉えていくしかないですからね」

「ええ、そうですね」

私は頭を下げると、医師も形式ではあるが丁寧に頭を下げ、そして私は診察室をでた。

その後、母は特別養護老人ホームに入った。

その頃、老人とくゆうの偽通風を患って、一気に体が弱くなったからである。入所するのに数年待ちというのをよく聞くが、タイミングなのか、こちらの事情を汲んでなのか、スムーズに入所できたことにびっくりしている。入所したところは、自殺行為の真似や施設から逃げ出す一幕もあったが、一カ月ほどすると施設にも慣れて今では穏やかに過ごしているようだ。ここでも母の順応性の高さがでて良かったと思う。面会に行く時も、最初は「家に帰りたい」と繰り返ししていたが、今ではそんなこともあまり言わなくなった。日帰りの家へ連れて帰った際も、「そろそろ戻ろうか」と私が言うと、母は家の裏庭をしばしばと見て「そうやな、帰ろうか」と返事して、その後、ぼろっと「クロちゃんとトラ子どうしたやろな？」と呟いた。

母が入所した頃はまだケージには入っていた。人目などを気にせずセックスも一度はやった。窮屈で痛いだけでなんの味気もなかった。まだ一人でやる方がいい。そのうち母がいなくなったことが理由なのか、対峙することもなく、張り合いもなくケージの中で過ごすことが虚しく思えてきた。

しばらくして、縁側奥の箆笥の裏から、ごそこそと音がする。ネズミかなと覗いて見たら、まだ目の開いていない二匹の黒い仔猫がうずくまっていた。寒さに震えているように

も見えた。母猫はいない。離れて見ていると、クロちゃんらしき黒い猫が不意に現れ、私のほうに向いた。クロちゃんと名前を呼ぶと、ウンニヤと一声でわかる独特な声を発し私を見た。やはりクロちゃんだったんだ。どこから家に入ったのかと一瞬思ったが、この家も百年、あちらこちらに屋外と通ずる抜け穴ならぬ猫穴があっても不思議なことではない。ここで生まれ育ったクロちゃんにとつては朝めし前かもしれない。とりいそぎ、ダンボールに毛布を敷いて、二匹の仔猫を入れて様子を見ていた。すると、翌朝にはもぬけの殻だった。クロちゃんが警戒して二匹を違った場所に移したに違いない。今度は仏間のある屏風の裏にいた。その次は階段下の物置の奥に移した。本能と言えはそれで済まされてしまいが、生まれて半年も経たないクロちゃんにも母親としての子を守る愛情が備わっていたことに、少し愛おしさを感じてしまった。逆に、クロちゃんとトラ子の避妊手術をやっておくべきだったと後悔もしている。

それよりも猫屋敷になる前に、クロちゃん親子を隔離しておかなければならない。やはりケージに入れておかなければならないと思っただけで、同時にケージから出るいい機会かもしれない。そう思ったら、すばやく行動に移した。私の物をケージから出して、クロちゃんがいけない間に、二匹の仔猫をケージの中に移した。一人では大変なので、マユミさんにも手伝ってもらった。私の荷物は、床の間に吊りなおしてあった蚊帳の中に入れた。

そのうちクロちゃんがやって来て、少し警

戒するもケージの中に入って仔猫に乳を与えていた。二個繋ぎ合わせた広々とした檻の中に、三匹の猫がいる。なんと幸せな猫たちかと思っただけで、

「そのうちトラ子も子連れで帰ってくるわよ」

マユミさんは笑った。

「考えたら、ぞっとするよ」

「大丈夫よ、これだけの広さがあつたら、二世帯は暮らせるわ」

「大丈夫じゃないよ」

私は、まずクロちゃんの避妊と、二匹の仔猫の貰い手を捜さなければならぬと思った。そして、私は、蚊帳に視線を移した。

「ねえ、名残惜しいんじゃないの、ケージが」

「いや、つぎは蚊帳の中かな」

「マドレーヌたくさん作ってあげるから」

「蚊帳の中だったら、記憶を辿る小説なんか書けたりして」

「お母さんが呼んだのね、きっと」

彼女はじつと猫たちをみつめていた。

「母の置き土産だな」

「片付かないというか、終わらないわね」

「ああ、終わらない。逆に終るものって何かあるのかな」

了